【ミニ特集：日本とケベックにおける先住民の文学・文化的対話】

ケベック先住民の文学的表象と「領土性」の問題[1]
Les représentations littéraires des Autochtones au Québec et la question de la « territorialité »

ダニエル・シャルティエ
Daniel CHARTIER

1990年代ケベック文学の「移住（者）のエクリチュール」の思潮における文学形式や主題（亡命、領土への帰属、アイデンティティの流動性）を考察していくと、それと並行して、ケベックでは21世紀初頭以来、先住民のさまざまなコミュニティ、すなわちファースト・ネイションズ（とくにイヌー、ヒューロン＝ウェンダット、アティカメク、アベナキ）とヌナヴィクのイヌイットの双方から、文化的、言語的、政治的、そしてとりわけ文学的な主張の潮流が出現してきていることが分かる。

これらの民族の文学形式はもともと口承を基本としていて、起源は古いのだが、この時期から文字に書かれるようになったことで一般読者にとっては新しいものとして出現した。一般読者はこのようにして、それまでとくに民族誌学者を中心とした専門家たちの集団やコミュニティの内部だけで流布していた先住民の物の見方、世界観、視点を発見したのである。しかし21世紀からは、先住民のテクストはケベック・コーパスと連続的でもあれば、断絶してもいる文学テクストとして出版され、受容されている。作家のモニック・デュラン（Monique Durand）がイヌー出身のナオミ・フォンテーヌ（Naomi Fontaine）の小説作品について書いたように、それはケベック文学にとって「1つの小さな地震（un petit séisme）」だった。

ところで、この出現はより大きな運動の一部である。ファースト・ネイションズにとっては、南北アメリカ大陸全体（さらに他の地域、すなわちヨーロッパやロシアの北部、そして日本まで含む）における文学（とりわけ口承と結びついた2つの形式である詩と歌）による発言の運動、イヌイットにとっては、カナダとグリーンランドのイヌイットを含む周極世界の運動の一部である。

ファースト・ネイションズのいくつかの文化が産み出した作品、中でも

ケベック州のコート・ノール地方（本人たちはこの地を「ニッタシナン（Nitassinan）[2]」ととらえているが）に住んでいるイヌーの作品は、（その多くが初めからフランス語で書かれているか、フランス語とイヌーの言葉であるイヌー＝アイムン語の両方で出版されているため）フランス語圏では他の先住民たちの作品よりよく知られている。とはいえ、他の先住民の作品もフランス語に翻訳され始めており、それらの文学どうしの比較、対話、教育、研究が可能になってきている。たとえばイヌイットの作品の場合がそうである（とりわけヌナヴィク、ヌナヴト準州、グリーンランドの場合で、グリーンランドのニヴィアク・コーネリウッセン（Niviaq Korneliussen）の小説、『ホモ・サピエンヌ』（Korneliussen, 2017）はケベックの出版社であるラ・ププラード社から出版された後、フランスで「10/18」叢書に再録された）。そしてまた、アイヌ文学についても同様である。日本の同僚の協力のおかげで、2 点の作品が 2023 年にケベック大学出版局と北方･冬･北極の想像界国際研究所の〈霧氷の庭〉叢書から出版された。土橋芳美の詩集『痛みのペンリウク――囚われのアイヌ人骨』（Dobashi, 2023）と貫塩喜蔵のエセー『アイヌの同化と先蹤』（Nukishio, 2023）である。フランス語の出版としてはかなり異例のこれらの翻訳は、小倉和子、ジェフリー・ゲーマン（Jeffry Gayman）、リュシアン＝ロラン･クレルク（Lucien-Laurent Clercq）、桜井典夫、エティエンヌ･ローウ＝ジョバン（Etienne Lehoux-Jobin）、河野美奈子によって可能となった文化間の比較の作業の成果である。仏訳されたこれらのアイヌの書籍のおかげで、周極世界のすべての先住民の文化や文学に共通する要素、とくに文化や言語と結びついて認識される領土に対するそれぞれ異なる関係が見えてくる。

いずれにせよ、これらの文学の出現によって、われわれの文学研究の方法論、ジャンルの定義、さらには文学におけるフィクションの役割までもが問い直されることになる。これらの根本的な問いは倫理と文化の盗用に関する省察を伴なうものであり、それによって著者と読者の立場も変わることになる。先住民とはどんな人か？　自分のことを先住民作家だと呼べるのはどんな人か？　先住民の作品の読解、教育、歴史、解釈の根底にはどのような倫理的原則があるのか？　世界、環境、言語、文学とわれわれの関係について、先住民文学は何を語っているのか？　こうした問いが提起されるのである。

本稿では、先住民の問題一般、そしてしばしばこれらのコミュニティの文学テクストが内包している「領土性」の問題を通してこれらの問いに取り組み、その後、イヌイットとファースト・ネイションズの文学の出現が文学研

究に提起するより一般的な問題を考察してみたい。

先住民の領土性の問題

イヌーの詩人ジョゼフィーヌ・バコン（Joséphine Bacon）は、フランス語とイヌー＝アイムン語の 2 言語表記による詩集『ツンドラでのお茶』（Bacon, 2013）において、彼女のコミュニティが暮らさなければならなかった保留地という西欧的空間と、北方のイヌーの領土―― 伝統的に彼女の民族の知識、文化、社会性、生存の源泉となっている――とのあいだで彼女が経験した二項対立を想起している。

> わたしはぐずぐずと夢想している
> わたしは寄宿学校にいる
> 9 月、わたしは両親と一緒に出発する
> 領土に向かって
> […]
> 今回は、それが不可能だ
> 読み書きを学ばなければならないから
> […]
> わたしは自分のアイデンティティ形成のための
> 授業を休まなければならない（Bacon, 2013, p.72）

この詩句において、ジョゼフィーヌ・バコンは彼女のアイデンティティがこうして自分から遠のいていくのを見る苦しみを表現している。それは彼女が「領土」―― ツンドラ――と呼んでいる、自分の文化、言語、知識の源泉である土地で家族や仲間とともに時間を過ごすことができないからである。毎年 9 月になると、彼女は家族から離れて学校――寄宿学校――で生活しなければならないが、彼女は身体的にしかそこにいない。実際には、彼女は寄宿学校では自分の領土、自分自身、つまりイヌーの世界に「いない」と感じているのである。

「領土性」の問題は、先住民たちの文化的、文学的表現、彼らのアイデンティティに共通した中心的なものであるように見えるが、同時に、彼らを統治、法律、実践によって政府と対立させる紛争の只中にあるものでもある。先住民と政府との紛争も、彼らを結びつける合法的な条約も、多くの場合、この領土性に関連している。一方にとって、領土は開発すべき資源であり、維持

すべき政治的主権を意味する。他方にとっては、領土は自分たちのアイデンティティ、記憶、文化、そして民族の生存の可能性から切り離すことのできないものである。

先住民の領土性

ヒューロン＝ウェンダットの劇作家イヴ・シウイ・デュラン（Yves Sioui Durand）は、ケベック州議会がケベックの領土に住む 10 の先住民族を承認した 1985 年に戯曲『世界の苦悩を担う者』（Sioui Durand, 1992）を創作した。彼はその序文で、先住民にとって「領土」という言葉は西欧的な「土地」についての法的観念より統合的なものであることを思い出させてくれる。彼によれば、領土は自然、文化、言語、自由に同時に関わっている。彼は次のように書いている。

> われわれが人間性を保持したいなら、領土は手つかずで自由なままでなければならない。［…］領土はわれわれにたいして、自分たちの文化と祖先の生活様式を明らかにしてくれる。それはわれわれの言語を活性化し、われわれの自由と未来を保証してくれる。（Sioui Durand, 1992, pp. 13-14）

シウイ・デュランは自作の中で間アメリカ的（interaméricaine）立場を取っているが、同胞の権利を擁護するだけでなく、南北アメリカ大陸のために世界についての先住民的ヴィジョンを提唱しようと願い、次のように書いている。

> 世界文明はアメリカ・インディアンを必要としているが、それは、保存すべき民俗学的関心としてではなく、インディアンの積極的な文化的価値観が、平和を意識し、土地や時間を分け合うことによって、世界文明をよい方向に変革しうるからである[3]。

エッセイストのジャン＝フランソワ・レトゥルノー（Jean-François Létourneau）は、2017 年に発表されたエセー『血管の中の領土』（Létourneau, 2017）において、ケベックのファースト・ネイションズの詩人たちの実践と領土に対する彼らの本質的関係からアメリカ性（américanité）を再評価している。彼によれば、領土と先住民の著作とのあいだに織りなされる特異な関係は、他の文化にインスピレーションを与え、さらには南北アメリカ大陸の

文化を伝達する1つの媒体になる可能性がある。彼は、書くことの実践と環境に対する関係が切り離せないものとなるところまで領土と先住民作家は互いの関係をいわば「内化」しているのだと考えている。そこから、領土は外的要素ではなく、彼の著作のタイトルに示されているように「血管の中に」存在するのだという考え方が生まれるのである。このことは西欧的な考え方、とりわけ「財産」と「人」の分離、しかしより一般的には「自然」と「文化」の区別をも前提とした権利に基づいた―― これについては後述する―― 考え方を覆す。ファースト･ネイションズのテクストの分析に基づいて、レトゥルノーは、先住民の物の見方によって問われるのはこの区別の根拠だと言う。

先住民性と西欧的思考とのあいだのこの相互的影響に辿りつくために、レトゥルノーは米国の歴史家リチャード･ホワイト（Richard White）の「ミドル･グラウンド（Létourneau, 2017, p. 18）」、すなわち、「共通の場」または「妥協点」の概念に立脚する。それは双方の人々の物の見方、目的、ニーズのあいだに紡がれた網目のようなものだが、ただし、ふたたび対等になり、差異を尊重する関係においてである。南北アメリカ大陸の比較の文脈では、（ファースト･ネイションズで初めて自分たちの歴史を書いた）ジョルジュ・エムリ・シウイ（Georges Emery Sioui）の「アメリカらしさ（américité）」の概念と（Sioui,1989）、言語学者であり地理学者でもあるルイ＝エドモン・アムラン（Louis-Edmond Hamelin）によって定義された「元来のアメリカ性（américanité première）」の概念[4]は、ヨーロッパ的な見解と先住民的な物の見方との「中間」にある概念により、領土、文化、権利のあいだの関係を再評価するための基礎として役立つ。

文化的表現に基づいたこれらの提案は大きな広がりをもつ。というのもそれはファースト・ネイションズの著作の解釈だけでなく、領土のとらえ方や、個人、文化、自然のあいだの関係のとらえ方、そしてヨーロッパ人のみならずヨーロッパに出自をもつ大部分の南北アメリカ大陸の国々と社会によっても擁護されたようなアメリカ史の再定義にも関わっているからである。こうして、レトゥルノーによれば、

> したがって、私が素描しようとしているこの領土の詩学は、ファースト・ネイションズの詩人たちが領土について言おうとしていること、とくに彼らが文学作品の中で自然界にたいして寄せている特別な関心に耳を傾けることに基づいている。これにより、「新世界」、遊牧生活、文化と自然の関係といったい

> くつかの概念を脱構築することができる。先住民族にとっての領土との関係は、領土が厳密に地理的空間としてではなく、「文化を生み出す母胎 (Thibault et Girard, 2009, p. 68)」として認識されていることを示している。 したがって、ファースト・ネイションズの現在の詩的な言葉は、アメリカ領土を「新世界」の概念から切り離してアメリカらしさの概念に近づけることによって、アメリカ領土との関係を再考するよう促すものである。(Létourneau, 2017, p. 50)

先住民の著作がわれわれの世界理解にもたらすもの、およびそれらの著作の領土との関わりについてのこの考察は、「視点の逆転」と呼ばれているものの一部を成している。それは多くの民族の場合、最初は文化的表現、とくに歌や詩で始まり、その後、法的側面や人権へと向かうものだが、かならずしも政治的活動の段階を経るとはかぎらない。多くの場合、文化的要求と法的要求が直接つながっていることに気づくことになる。

17 世紀から 20 世紀にかけて、ファースト・ネイションズやイヌイットに関する固定観念や軽蔑的な常套句を生み出して広める大きな原因となったエクリチュールは、今では多くの作家たちが自身の文化を取り戻し、アイデンティティを擁護し、長いあいだ過少評価されてきた概念や観念を促進するために使用する手段となっている。したがって、文学は先住民に関する固定観念を構築し、彼らを保留地に住まわせることの法的根拠を正当化することに寄与してきたのだが、その文学そのものが 20 世紀末の転換点以来、今度はこれらの紋切型を転倒させ、領土との関係を改めて疑問に付す歴史的、概念的根拠を提示することに役立っているのである。

ケベックにおける先住民文学の出現

20 年ほど前から、われわれは南北アメリカ大陸のいくつもの社会において先住民が文化的にもたらしたものを認識し、ケベックのようないくつかのケースでは、まさに「21 世紀におけるイヌイット文学とイヌー文学の魅惑的な出現」を確認している。これは 2019 年に私がこの問題を扱った論文のタイトルとして使った表現なのだが、「文学的事実についての方法論的再解釈」を伴なうものである（Chartier, 2019）。この「出現」は、先住民の立役者――詩人のジョゼフィーヌ・バコンや、イヌイットの歌手エリザピー・アイザック（Elisapie Isaac）、イヌーの小説家ナオミ・フォンテーヌのことを考えてみよう――が才能ある芸術家や作家として認識されるだけでなく、彼女たちが

メディアや新聞にたいして、それまでほとんど知られていなかった文化的、言語的、領土的観点をもたらしたときに起こったものである。したがって、ある世代は、それまで決まり文句や常套句を通じてのみ伝えられてきた先住民の多元性を自分自身が住む社会の中に発見することになる。いずれの場合も、領土の問題はこれらの作品の中心にある。

われわれはたとえばイヌーの小説家ナオミ・フォンテーヌやイヌーの詩人ジョゼフィーヌ・バコンの著作において、「ヌーチミット（*nutshimit*）」という観念により領土の概念が中心的なものであることを発見する。この語は彼女たちのテクストの中ではイヌー＝アイムン語でそのまま使われていて、フランス語に翻訳することは難しいが、記憶、文化、資源、治癒をもたらすものである領土に包括された関係を前提としている。

ナオミ・フォンテーヌは、彼女のコミュニティの若者たちが保留地の中に閉じ込められているときさまざまな困難を抱えていると述べているが、彼らが北方に行き、自分たちが「領土」と呼んでいる場所で暮らすことができるようになったとき、自分自身を、そして世界と彼らとのつながりを再発見するのだと語っている。2011 年に出版された彼女の小説『クエシパン』において、フォンテーヌはこう書いている。

> 困惑した男にとって、「ヌーチミット」は平和だ。 彼が必死に探し求めているこの心の平安。誰にも聞かれずに、苦悩のあまり、夜通し叫び続けた後のこの沈黙。モミの木の針葉をざわめかせる風の静寂。他の十羽ほどの傍らをさまようヤマウズラの沈黙。1 メートルの雪に埋もれながら流れ続ける小川の静寂。（Fontaine, 2011, pp. 65-66）

しかしながら、この状況についてはやや声を低めて、先住民文学の出現とその積極的受容――ときには、ケベックの場合のように熱狂的な受容もあるが――は彼らのコミュニティの運命を改善するために即座に効果があったわけではなく、ファースト・ネイションズの社会的、経済的、法的状況が好転するには次なる変化が必要だということを思い起こさなければならない。文化的表現と権利のあいだにつながりが存在することは確かであり、そのつながりの中心には領土との関係がある。しかし、南北アメリカ大陸で伝統的に不和の原因となっている、領土との関係の西欧的形態と先住民の物の見方とのあいだの交渉はどのように想定すればよいのだろうか。

領土紛争と条約

このように、先住民と政府を対立させている主要な紛争が、とくに領土に関する問題であることは驚くにはあたらない。領土の占領、管理、整備、統治、資源開発など、問題はさまざまである。ケベックの北部に住むクリー、ナスカピ、イヌイット、さらにはノルウェーの北部に住むサーミの場合がそうであったように、先住民族を反応させ、政治的で法的な対立に導くものは、外部によって決定された資源開発かエネルギーインフラの建設計画である。例えば、ダムを建設して水力発電を行い、ケベック州南部に送電するためのジェームズ湾河川開発の意向は、最終的に 1975 年に先住民族のクリー、イヌイット――そして 1978 年にはナスカピ――とカナダ連邦政府およびケベック州政府とのあいだでもっとも重要な調印が行われるにいたった。すなわち、「ジェームズ湾とケベック州北部の協定」である。

われわれの世界理解に対する先住民の貢献

劇作家イヴ・シウイ・デュランが提唱していたように、先住民が世界にもたらすものは領土的紛争と権利要求だけではない。それはファースト・ネイションズやイヌイットの原理、価値観、概念を明るみに出すための、文化的にも知的にもより広範な運動である。それが目指しているのは、人間をもはや中心にではなく生物と無生物の世界全体の中に位置づけなおす、環境に対するより包括的なヴィジョンを引き出すことである。南北アメリカ大陸の先住民の場合、その自覚は、保留地をつくられたこと、彼ら自身に関わる決定から自分たちが排除されていること、そして彼らの領土における資源がほとんど敬意を払われることなく開発されることなどにより、自分たちの領土との関係が悪化したことが根源にあるが、そのことは、より一般的な世界観を排除するものではない。したがって、そのような文脈において、彼らの要求や提案は、われわれの「持続可能な開発」や「エコロジー」といった環境に関する概念をはるかに超えたいわゆる「全体論的」な関係を奨励することによって、人類の存続自体にまで関係するのである。それはたとえば、グリーンランドの活動家で作家でもあるラナ・ハンセン（Lana Hansen）が彼女の『シラ』と題された『気候変動に関するグリーンランドの寓話』（Hansen, 2020）の中で提唱した「ヌナ（nuna）」と「シラ（sila）」というイヌイットの概念による場合がそうである。

言語学者で地理学者でもあるルイ＝エドモン・アムランによれば、

> ［…］領土問題――あるいは西欧的次元に身を置くならば土地（不動産）の問題――は、つねに紛争や対立の中心だった。純粋に理論的な観点から見ると、この問題は和解不可能に見える。一方は、土地というものは、交換、譲渡、取得、売買できる財産だと考えているし、もう一方は、人間は自分を取り巻く環境から切り離されることができないもので、その結果、人間と土地、海、水とのあいだには、また社会的、文化的、そして生存のための慣行とのあいだには、分断はありえないという考えを擁護している[5]。

このように、ファースト・ネイションズやイヌイットの文化的、文学的表現は、多くの場合、今日それらの土地を統治している他民族の領土との関係性とは異なる関係性を取り戻そうとする傾向が強い。それは、ケベックであろうと、南北アメリカ大陸の他の場所であろうと、あるいはまた日本の北部を含む世界の他の場所であろうと同様である。この相違はしばしば、文化、知識、治癒、言葉の源泉である領土への執着というかたちでテクストの中にあらわれるが、しかしまた、領土性というものが先住民にとっては西欧人の場合よりはるかに強い意味合いをもつもので、彼らの存続とのあいだに結ばれている親密で強力な絆の必然性をめぐっておこなわれる権利要求の中にも現れるものである。紛争はしばしば領土に対するさまざまな関係を調整しようとする試みに関係している。

文学の領域においては、ジョゼフィーヌ・バコンの詩や、とくに「私は女性＝領土だ（je suis femme-territoire）」と書くケベックのナターシャ・カナペ・フォンテーヌ（Natasha Kanapé Fontaine）の詩の中に読めるように、人が住む世界とのこのような絆は先住民の言葉で表現される。それらの言葉には、たとえばイヌーにとっての「ヌーチミット」や「ニッタシナン」のように、文化と領土の関係を示す翻訳不可能な語の概念があるからである。文学においては、多くの場合、いったんフランス語などのヨーロッパ言語に翻訳されると、詩にも似た隠喩的関係が生まれ、文学的表現、アイデンティティ、生存、文化、そして環境に対するより「全体論的な（holiste）」関係とのあいだに超越性がもたらされてしまうのである。

（ダニエル・シャルティエ　ケベック大学モンレアル校）
（訳：小倉和子）

注

1　原注：本稿は、2023 年 10 月 7 日に東京で開催された日本ケベック学会全国大会における報告に加筆したものである。

2　訳注:イヌー＝アイムン語で「我らの土地」を意味し、ケベックからラブラドールにかけての土地を指す。

3　原注：Yves Sioui Durand, Théâtre Ondinnok による引用。http://www.ondinnok.org/fr/toutes-les-creations/la-creation-du-porteur-des-peines-du-monde/（最終閲覧日：2022 年 3 月 1 日）

4　原注：とくに、Hamelin（2014）を参照のこと。

5　原注：Chartier, 2014, p.14（Hamelin, 2014 の序文）。

文献

BACON, Joséphine (2013) *Un thé dans la toundra / Nipishapui nete mushua*, Mémoire d'encrier.

CHARTIER, Daniel (2014) « Introduction. Penser le monde froid », Louis-Edmond Hamelin, *La nordicité du Québec*, Presses de l'Université du Québec.

CHARTIER, Daniel (2019) « La fascinante émergence des littératures inuite et innue au 21e siècle au Québec : une réinterprétation méthodologique du fait littéraire », *Revue japonaise des études québécoises*, nº 11, pp. 27-48.（邦訳：シャルティエ、ダニエル著、桜井典夫訳（2020）「21 世紀ケベックにおけるイヌイット文学とイヌー文学の魅惑的な出現：文学的事実についての方法論的再解釈」、北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院編『多文化世界におけるアイデンティティと文化的アイコン：民族・言語・国民を中心に』55 ～ 77 頁。）

DOBASHI, Yoshimi (2023) *Penriuk et sa douleur. Ossements aïnous retenus prisonniers*, traduit du japonais par Etienne Lehoux-Jobin. Presses de l'Université du Québec, coll. « Jardin de givre ».

FONTAINE, Naomi (2011) *Kuessipan*, Mémoire d'encrier.

HAMELIN, Louis-Edmond (2014) *La nordicité du Québec*, Presses de l'Université du Québec.

HANSEN, Lana (2020) *Sila, Conte groenlandais sur les changements climatiques*, Traduit en français par Inès Jorgensen, Presses de l'Université du Québec, coll. « Jardin de givre ».

KORNELIUSSEN, Niviaq (2017) *Homo Sapienne*, La Peuplade, coll. « Fictions du Nord », 2014. Avec une introduction de Daniel Chartier.

KORNELIUSSEN, Niviaq (2020) *Homo Sapienne*, 10/18, 2014. Avec une introduction de

Daniel Chartier.

LÉTOURNEAU, Jean-François (2017) *Le territoire dans les veines*, Mémoire d'encrier.

NUKISHIO, Kizô (2023) *Assimilation et vestiges des Aïnous. Manifeste précurseur autochtone*, traduit du japonais par SAKURAI Norio et Lucien-Laurent CLERCQ, Presses de l'Université du Québec, coll. « Jardin de givre ».

SIOUI, Georges Emery (1989) *Pour une autohistoire amérindienne. Essai sur les fondements d'une morale sociale*, Presses de l'Université Laval.

SIOUI DURAND, Yves (1992) *Le porteur des peines du monde*, Leméac.

THIBAULT, Martin et Amélie GIRARD (2009) « Le territoire, 'matrice' de culture : analyse des mémoires déposés à la commission Coulombe par les premières nations du Québec », *Recherches amérindiennes au Québec*, vol. 39, nº 1-2, pp. 61-70.